

専門家に聞く

## インフルエンザウイルス講座

第7回

# インフルエンザの診断法

小澤 真

鹿児島大学共同獣医学部動物衛生学分野准教授  
鹿児島大学共同獣医学部附属越境性動物疾病制御研究センター分子病原微生物研究分野准教授

河岡義裕

東京大学医科学研究所感染・免疫部門ウイルス感染分野教授  
東京大学医科学研究所感染症国際研究センターセンター長

### インフルエンザの診断の意義

以前にもこの連載で触れましたが、多くのウイルス性感染症には専用の治療薬が存在しません。したがって、その診断を臨床現場で積極的に進める意義は限られています。しかしインフルエンザの場合、抗インフルエンザ薬を処方できるため、事情は大きく異なります。現在国内外で広く処方されているラニナミビル(商品名イナビル<sup>®</sup>)、オセルタミビル(商品名タミフル<sup>®</sup>)やザナミビル(商品名リレンザ<sup>®</sup>)などは、子孫ウイルスのウイルス感染細胞からの効率的な遊離・放出を促すノイラミニダーゼ(NA)の酵素活性を特異的に阻害することで、体内におけるウイルス増殖・拡散を妨げ、症状の緩和と速やかな回復を導きます。さらに、これらの抗インフルエンザ薬の治療効果を十分に引き出すには、発症後できるだけ早く、遅くとも48時間以内に処方を開始する必要があります。インフルエンザは急性感染症の中でもとりわけ

早い経過をたどることもあり、その診断は、迅速性も含め非常に大きな意義があります。

インフルエンザウイルスが原因となる感染症の中には、主に冬季に流行する季節性インフルエンザのほかに、普段はほかの動物種を宿主とするウイルスが散発的にヒトへ感染して病気を引き起こす、動物由来インフルエンザがあります。現在も東南アジアやエジプトを中心に感染例が断続的に報告されているH5N1亜型高病原性鳥インフルエンザや、2009年に発生したパンデミックの原因となったブタ由来のH1N1亜型インフルエンザがその代表的な例として挙げられます。このようなウイルスの多くは、その抗原性が季節性ウイルスと明確に異なるため、ワクチン接種や過去の季節性ウイルス感染にともなって誘導された免疫記憶に防御効果を期待することができず、抗インフルエンザ薬を用いた治療が重要となります。このような動物由来のインフルエンザウイルスに感染した場合、季節性インフルエンザと同様の臨床症状を呈することなく重篤化することもあるため、ウイルス